

「モリイク」は、コープ未来の森づくり基金が、森と人、森づくりと人をつなぐ目的で発行している冊子です。

コープ未来の森づくり基金レポート

モリイク

M O R I - I K U

森に行こう。
森で育とう。
森を、育てよう。

vol.14
Oct. 2017

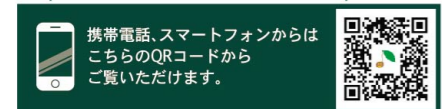


みなさんのおかげですもりは10年を迎え、モリイクもいつの間にか号を重ねてきました。北海道内のたくさんの森づくり取材させてもらって、たくさんの人と話しましたが、最近はその中でひとつ大きな信念のようなものが芽生えてきたように思います。それは、森づくりの多様性について。取材で訪れた団体がそれぞれの価値観とそれぞれの活動で森に関わり、森づくりをしていて、そしてそれはすべて、確かに「森づくり」だったのです。つまり、森づくりはいろんな形があっていいのだ、ということ。

在りし日にふと森というものの「存在」に気づいたことがあります。森にはたくさんの生き物たちの生と死があって、その多様さを抱きとめる深く、大きな懐こそが森という存在なのではないか。同じように、森づくりも多様だからこそ大切なのかもしれません。様々な価値観をすべて抱きとめることができる「森づくり」というものの懐の深さは、単一の価値観で塗り込められてしまいそうな重圧の人間社会に生きる人々にとって、ひょっとしたらオアシスのような存在になり得るのかもしれない。そんなことを思いながらモリイクのバックナンバーを読み返しています。

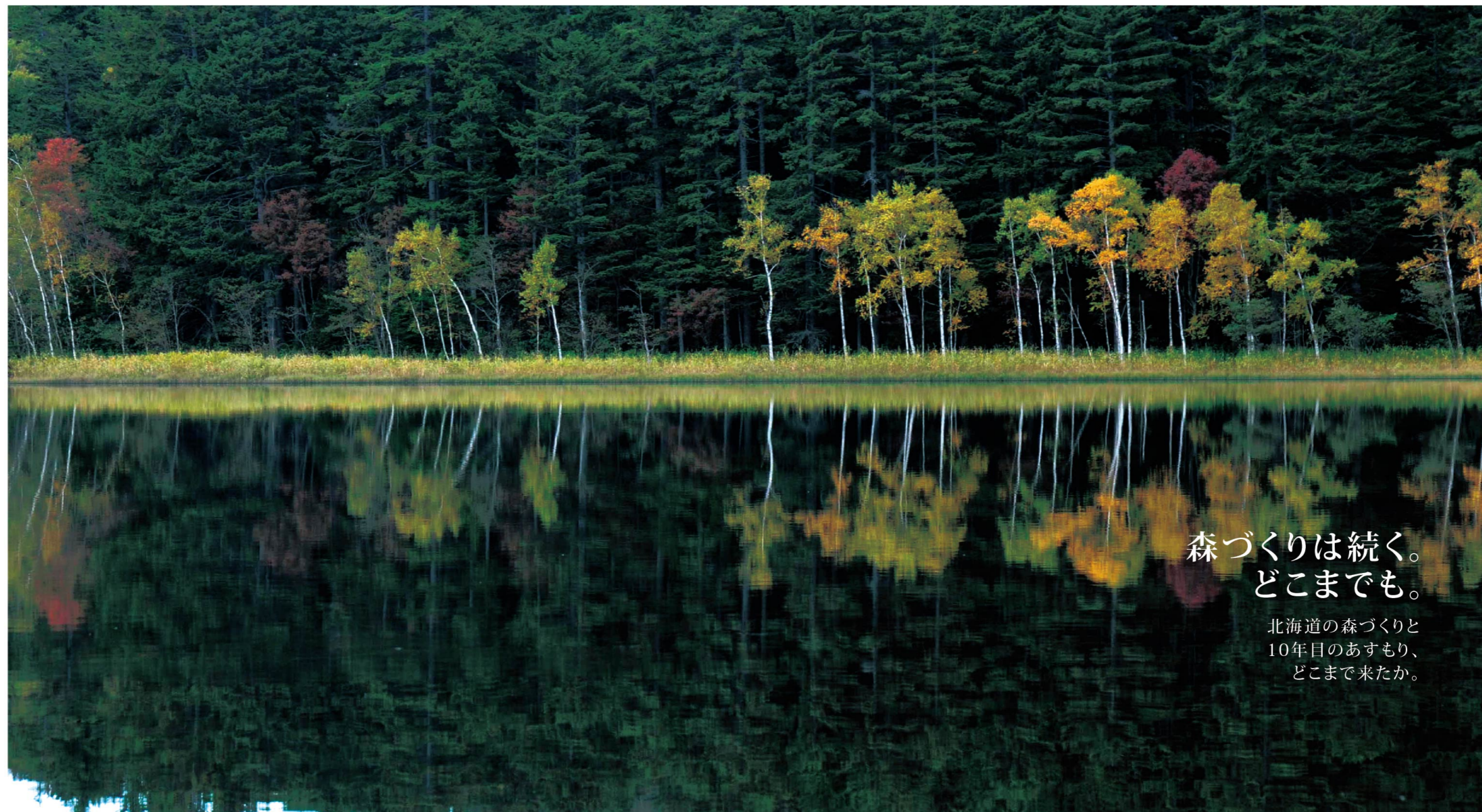
あすもりfacebookページ

<https://www.facebook.com/coop.asumori>



モリイク vol.14
2017年10月発行
発行元/ コープ未来の森づくり基金

この冊子は環境に配慮してベジタブルオイルインクおよび100%再生紙を使用して作成しています。



森づくりは続く。
どこまでも。

北海道の森づくりと
10年目のあすもり、
どこまで来たか。



コープ未来の森づくり基金は、組合員さんのノーレジ袋へのご協力で支えられています。

* contents *

- *02 コラム 森づくりのトレンド
未来のための市民による森づくり
- *04 特集 吉東・和みの森運営協議会
特定NPO法人サロベツ・エコ・ネットワーク
「あれから、どうなった？」
- *08 次の旅路へ。
家具工房 旅する木
- *09 もっと樹のことを語ろう
大きな木の小さな物語
- *10 親子で楽しむ森のページ
森のキモイ・キレイ
- *12 森林再生コラム
オホーツク、武蔵野、藻岩、いつもどこかの森で
- *13 コープ未来の森づくり基金報告
10年目のコープの森植樹活動
Fの森ワークショップ ほか



Starting Column 忘れずに、多様な森づくり。

現在、「森林環境税」の導入が検討されているのをご存知でしょうか？ 地球温暖化対策のために森林のCO₂吸収源を確保する税制をつくるのが与党税制大綱で決められたため、その実現に向けた検討が始まったもので、林業界をあげてその応援をしています。実はこれまでも間伐を進めるために地球温暖化対策・京都議定書遵守を名目に大量のお金が投入されてきました。これによってお金が大量に投下されて間伐が進んできたことは、

森林の整備という点ではよかつたといえます。一方で温暖化対策のためには間伐が必要という論理で、森林の整備はイコール間伐というステレオタイプな森林の見方が広がっているようにも思います。地球温暖化防止のために森林が重要、災害防止のために森林が重要など、森林をある特定の機能と結びつけてその重要性を訴えかけるのは、森林の重要性を認識してもらうために使いやすい手段であるとは思いま

す。しかしこの結果として、私達と森林との間にある多様な関係を単純化してしまうことは否めません。私達と森林との関係はもっと複雑であり、そして全体的なものだと思います。コープ^{あした}未来の森づくり基金の活動は森との丸ごとのお付き合いを考えてきました。植樹から木の活用までを考えた活動を行い、Fの森ワークショップでは森に深く入り込んで議論を積み重ねて森づくりのビジョンをつくりました。団体助成も自然再

生・森林文化・環境教育・人材育成など森林と社会との多様な関係づくりを支援してきました。これから大事なことはこうした多様な森林との付き合い方をお互いに認め、尊重し、そして連携していくことだと思います。私達の活動の中でこれまでつむいできた森と人を繋ぐ糸、森をめぐる人と人との糸を織りなして新たな人と森との関係をつくっていくことを考えながら、未来の森林づくりを進めて行ければと思います。✦

かきざわ ひろあき
柿澤 宏昭 北海道大学 森林政策学研究室 教授・コープ未来の森づくり基金 運営委員長

1959年神奈川県横浜市生まれ。北海道大学大学院農学研究所修士課程修了。現在、北海道大学農学部森林政策研究室教授。持続的な森林管理を多様な人々の協働で支えるしくみづくりをテーマに研究を行っている。また、欧米、ロシアなどの森林管理政策にも詳しい。主な著作に「エコシステムマネジメント」(築地書館)。2008年より「コープ未来の森づくり基金」運営委員長を務める。

「あれから
どうなった？」

あのころ、
モリイクで紹介した森づくりは、
どこまで成長し、
どう変わったのかな？
ちょっと聞いてみよう。



うまくいかないことも、思いもよらないことも起こる。周囲や自分自身の変化に合わせて考え方や手法を変えてみる。活動を続けていくのは一筋縄ではいなくて、それはきっと、森づくりと同じこと。今まで、モリイクではたくさんの団体の森づくりやその思いを綴ってきました。しかし、

木を植えるのと同じように、一度紹介しただけでそのあとどうなったのかわからない。それでは無責任というもの。成長を見守ってこそ「森づくり」を語るモリイクであると思うのです。そこで、今回は、以前紹介した森づくりの現場をもう一度訪ねることにしました。長い

時間が過ぎて、成長するのは森だけではないはず。あれから何が起きてどう変わったのか、そしてどこへ向かうのか。挫折と成長を繰り返して、光を求めて違う方向に枝を伸ばしていくその先に、北海道の未来の森づくりが見えてくるのではないかと思います。

今回再訪した森づくりの現場

11 吉東・和みの森運営協議会
モリイクvol.1で紹介した、苫小牧東部エリアの里山で活動する団体。市民の集う森、「コミュニティ・フォレスト」を目指して森づくりを展開しています。

モリイク vol.01

12 NPO法人サロベツ・エコ・ネットワーク
貴重な稚咲内砂丘林を復元を目指して活動しています。人も木も、地域にこだわった森づくりはどこまで進んだでしょう？ vol.3で紹介しました。

モリイク vol.03



苦東・和みの森

運営協議会

新しい森づくりのカタチに迫る。

「コミュニティ・フォレスト」という、当時あまり聞きなれない言葉を軸に、活動10年を迎えた「苦東・和みの森」は、このモリイクが創刊して最初にご紹介した団体です。森づくりとしては新機軸とも思えるこのコミュニティ・フォレストは今、どのような展開をしているのでしょうか。

「そういうことか」の10年

「活動のイメージはあったけど、協議会のメンバーからは懐疑的な意見が多かった。本当にコミュニティ・フォレストなんてできるの？という、そういう時代だったね」と語るのは、和みの森のディレクター、上田 融さん。当初から和みの森のビジョンを描いて活動を進めてきました。

もともと、2007年に行われた全国植樹祭の跡地を活用する目的で発足したこの活動、行政や企業が集まって協議会形式で運営が始まりましたが、誰も10年後の姿を想像できなかったといいます。今まで継続して、この様子を見て、ようやく「こういうことか」と伝わった。そして活動の方針は間違っていないかった。そう感じたのがこの10年でした。

目標値の達成度

当時、目標にしていたことのひとつが「森に縁遠い人にたくさん来てもらうこと」。つまり、森に興味のない人に来てもらう、間口の広い森をつくるということです。

現在、和みの森を訪れる人は年間1000人ほど（一時は2000人も!）、そのうちの5~6割が初めて森に来る人だとか。これは、地元幼稚園とのつながりや、お母さ

んたちの口コミなど、地道に広げてきた評判が元で実現していることなのでしょう。これだけ間口の広い森づくりは、他にあまり見ないように思います。

もうひとつはバリアバリューというキーワード。小さい子どもや車椅子ユーザーの方が活躍する森づくり。例えばトラックに薪を積むなら小さい子の方が効率がいい、例えばハスカップの実を摘むなら車椅子ユーザーの方が断然活躍する、などなど、普通なら森を敬遠してしまう人たちが動ける、そんなバリアバリューな森を今よりも広げていきたいというのは、引き続きの目標でもあるといいます。

誰もが楽しむ利用者による森づくり

「利用者自身が管理する森」というのも、当初からの目標のひとつ。どこまで進んだのかを聞いてみると、上田さんは「僕が活動をディレクションしなくなったね」とのこと。つまり、来た人が勝手に森づくりをしている、ということ？

和みの森に来ると、様々な活動がそこかしこで行われていることに驚きます。火を焚いてみたり、料理を作ってみたり、秘密基地を作ってみたり。みんなで遊ぶ子どもたち、一人でひたすら薪割りの腕を磨く子ども。森林整備に精を出す男性陣の姿も。来た人たちが思い思いに過ごしている光景はとても印象的。しかし、実はその活動の全てに森づくりという要素が組み込まれていることは、もしかしたら気づかない人もいるかもしれません。

和みの森では、やって来た人そ

れぞれがそれぞれの楽しみ方で森にいるけれども、知らず知らずのうちに森づくりに参加している。そんな設計がなされていますが、当初はこの動きをディレクションしないと活動にならなかったのだそう。10年が経ち、みんなが森で自分の楽しみ方をして過ごすうち、ごく自然に森づくりに参加するようになったのです。つまり、参加者自身が自分たちの楽しみの場（森）を管理（つくる）しているということなのです。

森づくりから起業へ

ひとつ、当時は予想できなかった森づくりの効果がありました。それは、森づくりからお母さんたちのビジネスが生まれていること。和みの森に子どもを連れてきていた、参加者だったお母さんたち。今ではスタッフとして働き、自分たちで木や森を題材としたプログラムを提供するビジネスを起業したのです。「グローバルマネーを得る手段として森づくりを活用している。というのは、その頃は考えもつかなかったよね」と、上田さんは当時からの驚きを語ります。

和みの森発、新しい森づくりの姿

ひとつひとつ目標をクリアし、また、社会が活動を理解してきたこの10年。ところで、和みの森では今は植樹などはしていません。その意味でやはり普通の森づくりとは一線を画します。では、和みの森が目指し、実践する森づくりとは何か。その質問に対し、上田さんは、「全国にある植樹祭跡地をコミュニティ・フォレストのよ

うな手法で持続させていきたいと思っているよ。植樹祭跡地は幼児が全部管理していきますよ（笑）。とかいって」と答えます。なるほど、全国に和みの森があるのならば、森と人のつながりはずっと深まるに違いありません。その手法としては、例えば「森のようちえん」のような、幼児が森に来る仕組みが有効なのだといいます。「幼児が来れば大人は必ずついてくるよね。それが大事なんだけどね、子どもが真ん中にいれば、大人が森につながるよね」。森づくりに来てほしいのは親子なのです。これには、森づくりが「人を育てる」手法でもあるからだといいます。親子で森を作り、大人が森づくりにつながることで、森づくりの技術や知識が受け継がれていく。森づくりは人づくりでもあるのです。

「そうやって、総論的に見ると森がよくなっている。それが僕たちの森づくりかな」。今後は森のようちえんの全道ネットワークを作って、親子が森に来る仕組みづくりをしていくとのこと。

和みの森をモデルケースにしてたくさんコミュニティ・フォレストを生み出し、それが日本全体の森を変えていくという大きな流れを生もうとしている「和みの森」。もしかしたら日本の森づくりの姿を大きく変えていくことになるかと思うと、この先の10年も目が離せません。✦



和みの森ディレクター 上田 融さん



①大人顔負けの薪割リスキルを身につけたり、体の小ささを生かしてトラックに薪を積み上げる子どもたち。



②料理やクラフトや火おこしなど、自分たちの好きなように、自由に過ごすのが「和みの森」の森づくりの基本スタイル。



③様々な人が集まって、それぞれの居場所がある。「和みの森」をモデルケースとしてコミュニティ・フォレストを全国に広めていくのが今後の目標。

サロベツ・エコ・ネットワーク

育つ森、 新たなる希望と課題

「あれから
どうなった？」

暮らしと湿原を守る 森づくり、進む。

道北の日本海側に広がる日本最大の
高層湿原であるサロベツ湿原は、豊富
町の観光を支える大切な環境です。

その湿原を海から守るように連なる
のが稚咲内砂丘林。多様な森が懐に湿
原や湖沼を抱く、他では見られない不思議の森です。この森が海からの風を遮り、人の暮らしと湿原を守ってきました。しかし、放牧の影響などで森の一部が失われたことによって強烈な海風が人の生活を脅かすようになりました。そこで、失われた森を回復させよう、というのが、特定非営利活動法人サロベツ・エコ・ネットワークが行う森づくりです。

地元のどんぐりを使って苗を育て、植樹していく森づくりは今年で12年目。苗づくりや植樹にも失敗を重ねて苦労しましたが、「順調に森は育っていて、今は育樹と、新しい場所に植樹を広げていると

ころです」。と話すのは、森づくりを担当する吉原さん。どんぐり集めや苗を育てる段階はもう終了して、今は失われてしまった森に、どんどん植樹を進めているのだそうです。防風柵の中に植えられた樹齢10年を超す木々は背丈よりも高く、海風を遮るようになりました。当初予定されていた3haの区画はもういっぱいになって、区画の外側にも植樹を進めていて、その木々もすくすく育っています。

森づくりとコミュニティ、つなぐ。

森づくりは人の暮らしや、大切な湿原を守ることに繋がりますが、地域の人々のつながりをつくる役目も果たしていました。砂丘林のほりにある稚咲内はとても小さな集落ですが、毎年の植樹には、子どもからお年寄りまで、集落の人が集まるよい機会だったといいます。しかし年を追うごとに、人口は減りつつあり、植樹の顔ぶれも寂しくなってきたとか。森づくりは今でも地域をつな

ぐイベントであり続けていますが、残念ながら人口の減少に歯止めをかけることは簡単ではありません。

「でも、豊富町には音楽とか温泉とか、稚咲内の集落にも子育てサークルをやっているお母さんがいて、元気なコミュニティがたくさんあるんです」。吉原さんは、そのコミュニティをつないで、もっと町の人を森づくりに巻き込みたいといいます。「地元の中学校の授業でも苗木のカウント調査と一緒にやったり、植樹の時には町の小学生20人ほどが参加するようになったりと、今は新しいつながりを少しずつ育てています」とのこと。

また、ここ数年、豊富町を訪れる旅行者も以前と変わってきています。個人旅行や温泉の湯治客の中には冬に湿原を歩くことを目的に来るお客さんもいるのだとか。吉原さんも新しいイベントやガイドを通じてサロベツの魅力を広く伝えていて、町民や観光客にサロベツの自然に触れる接点は着実に増えているこ

とを感じるといいます。サロベツの自然の価値は町の内外問わず、認められ始めているのでしょう。

サロベツをどうしていくか。 持ち上がる、課題。

一方で、サロベツを取り巻く新しい問題も出てきました。中でも最も頭を悩ませているのが風力発電の問題。

宗谷地方は強い風が吹くため、風力発電の有力な候補地となっています。すでに苫前町や幌延町、稚内市でも林立する大きな発電用風車の光景を見ることができ、豊富町でもサロベツ原野を取り囲むように風車を立てる計画が進んでいるというのです。

「再生可能エネルギーが増えるのはいいこと。だから風力発電に反対なわけではないんですけどね」と困り顔で話す吉原さん。湿原の自然環境は大切な観光資源。出力の高い大きな風車がたくさん建ってしまうと、サロベツの景観にも大

きな影響を及ぼしてしまうことが懸念されています。

心配される影響は景観に止まりません。実は、サロベツ原野は北海道を通過する渡り鳥の多くが通る重要なエリア。だから風車に衝突する鳥たちが増えるのではないかと考えられているのです。年々渡来数が減っているシマアオジやオオワシ、オジロワシなどの希少な鳥たちは、特に深刻な影響を被る可能性もあります。「渡り鳥のルートを外すとか、渡りの期間は風車を回さないなどの配慮があるといいのですが…」周辺の自治体や各官庁、そして地元の意向など、複雑な関係の中でサロベツの環境保全を進めていくことの難しさを感じるといいます。

発電用風車の建設は森づくりで守っていききたい砂丘林のそばにも計画されており、こちらも繊細な環境だけに何かしらの影響が出るのではないかと心配されます。

未来に向かって、進め森づくり。

順調に育つ苗木、衰退する地域社会、新しい人のつながり、そして開発と環境保全。うまく進んでいることも解決しなければならない課題もありますが、そんな中、吉原さんは、「地域のコミュニティをつなげて、サロベツの自然を守っていききたい。地域のことは地域で守っていききたいんです。また、この取り組みを知ってもらって、たくさんの方々に参加してもらえるようにPRなども展開していきたいです」と、未来へ向けてのビジョンを語り、「森づくりだから時間はかかりますけどね」と笑います。

他に例を見ない貴重なこのサロベツ原野の環境を保全することこそが未来への架け橋。地域の人たちが集い、学び、気づくための要石が森づくりで、それは多くの難しい課題を解決する力にもなるのでしょう。地域の未来を育てる森づくりは、苗木のように時間をかけながらも、少しずつ育っていました。▲



(左から) ①どんぐりから育った苗畑のミズナラたちは植樹を待つばかり。 ②床替えなどの育樹作業もみんなで行います。 ③植樹は活着のいい秋に一齐に行います。今は、当初の予定の区画外の森の復活を目指して植樹を広げています。 ④2.5mほどに育ったミズナラ。樹齢は8年ほど。 ⑤地域のみんなで育てる森。地域のことは、地域で守る。
写真提供: 認定NPO法人サロベツ・エコ・ネットワーク

「みんなが、自分のやるべき役割、使命に出会うべくして出会って、きちんと表現できる世の中になるといいと思うんです。」と話すのは「家具工房 旅する木」の須田さん。「旅する木」といえばこのコーナーの初回（モリイク2号）^{のみ かんた}に紹介した、鑿や鉋の手仕事を大切に、仕口の美しい家具を作るオーダーメイド専門の工房。今では木工以外にも興味深い活動を展開していると聞き、工房を訪ねました。

見せていただいたのは、なんと木の車椅子。車輪や軸受け、細かいパーツなど、ほとんどが木でできていて、その設えは高級家具そのものです。家具としては特殊といえる車椅子を木で作ることについて、須田さんは「世の中のすべてのものが木で出来てほしい、という根本的な思いや同業他社との差別化から、車椅子は創業当時から作りたいと思っていたんです。」といいます。ただ、技術的な難しさもあってすぐにはチャレンジできなかったとのこと。工房を起ち上げて5年の節目に、当初の思いを形にしようと考えたとあります。そして、「外出が面倒臭いとか、恥ずかしいと思う車椅子ユーザーだってこんな車椅子があれば、もっと外に出たいとか、社会で活躍したくなると思うんです」と、車椅子がただの道具ではない、車椅子が必要な人たちがもっと社会との接点を広げるための、新しい使い方・思想の提案なのだとの思いを語ります。また、「この車椅子で活躍する人を見て、健康者が『もっとがんばらなきゃ』って自分を見つめ直すようなものを目指しています。だから、ただ木で作ったというだけでなく、きちっとデザインされていて、ぬくもりのあるものを作りたい」。この車椅子は、ユーザーのためだけではない、社会全体に対するメッセージでもあるのだといいます。

しかし、美と機能を完全に持ち合わせているように見える車椅子も実はまだ試作。「車椅子ユーザーの障害は様々。その人に本当に合ったものを作るように、学びと実践を通してノウハウを積み上げていく予定です」。完成までの道のりは遠いのだとか。



家具工房 旅する木

<http://tabisuruki.com/>



座るのが嬉しくなるのでは?と思うような美しい車椅子(上)。繊細で優しいラインの家具作りも健在(中)。緊張した面持ちながら札幌の地下歩行空間で通行人に声をかける職業体験の子どもたち。自分たちが作った製品は完成し、「幸せだー!」と歓声を上げたとのこと(右下)。若い人たちの自己実現の場を広げたいと話す須田 修司さん(左下)。

※職業体験で子どもたちが作った箸置き(優美なデザインに驚きます)を読者プレゼント。詳しくは19ページをご覧ください。

さて、演劇の開催に子どもの職業体験。どちらにもわかに家具工房の仕事には思えません。これも「旅する木」の活動です。

若き日の須田さんが夢見て諦めたのが脚本家への道。演劇に興味を持った娘さんのために脚本を書き、公演の場づくりをしたのは、「何かやりたいという燃えるような思いをぶつけることができた人とそうでない人がいる。ぶつけることができなかったって後悔をしてほしくないです」と、自分が脚本家を諦めてしまった後悔に加えて、何かをやりたいと思う人の気持ちを応援し、やり遂げた達成感を味わってもらいたいという思いがあります。

一方で昨年夏休みに開催している子どもの職業体験は、木工製品の企画から製作、販売して決算が終わるまでをチームで行うという本格派の体験教室。こちらについては、ものを売ってお金を得るというリアルな仕事を感じてほしいという他に、苦勞して、思いを込めて作ったものが売れるという喜びを感じてほしいとのこと。「それを知っているのと知らないのでは、仕事を選ぶような人生の選択の時によい選択ができないかもしれない。条件だけでなく、自分の心が動く選択をしてほしい」。これには、条件だけで就職を決めてしまい、結局そのことで悩み、遠回りをしてしまった須田さん自身の体験もあるのだとか。

木工作家の範疇を超えて様々な活動を広げる須田さん、その思いの根本には、深く自分の体験が根ざしています。「自分のやるべき使命、役割にきちっと出会い、一人ひとりが表現できる世の中になれば、戦争も自殺する人も減ると思うんです。そのための小さな種を、みんなの心に植えていきたい」。自身が木工という表現に出会えたように、車椅子でも演劇でも職業でも、すべての人が自分のあるべき役割に出会える、そんな世の中を目指して、「旅する木」はこれからも旅を続けていこうでしょう。木工だけではなく、途中で植えた小さな小さな種たちが芽吹いた社会は、木の家具のようにぬくもりとやさしさに満ちているんじゃないか。そんなことを思いました。✿

大きな木の小さな物語

⑨ ツリバナ

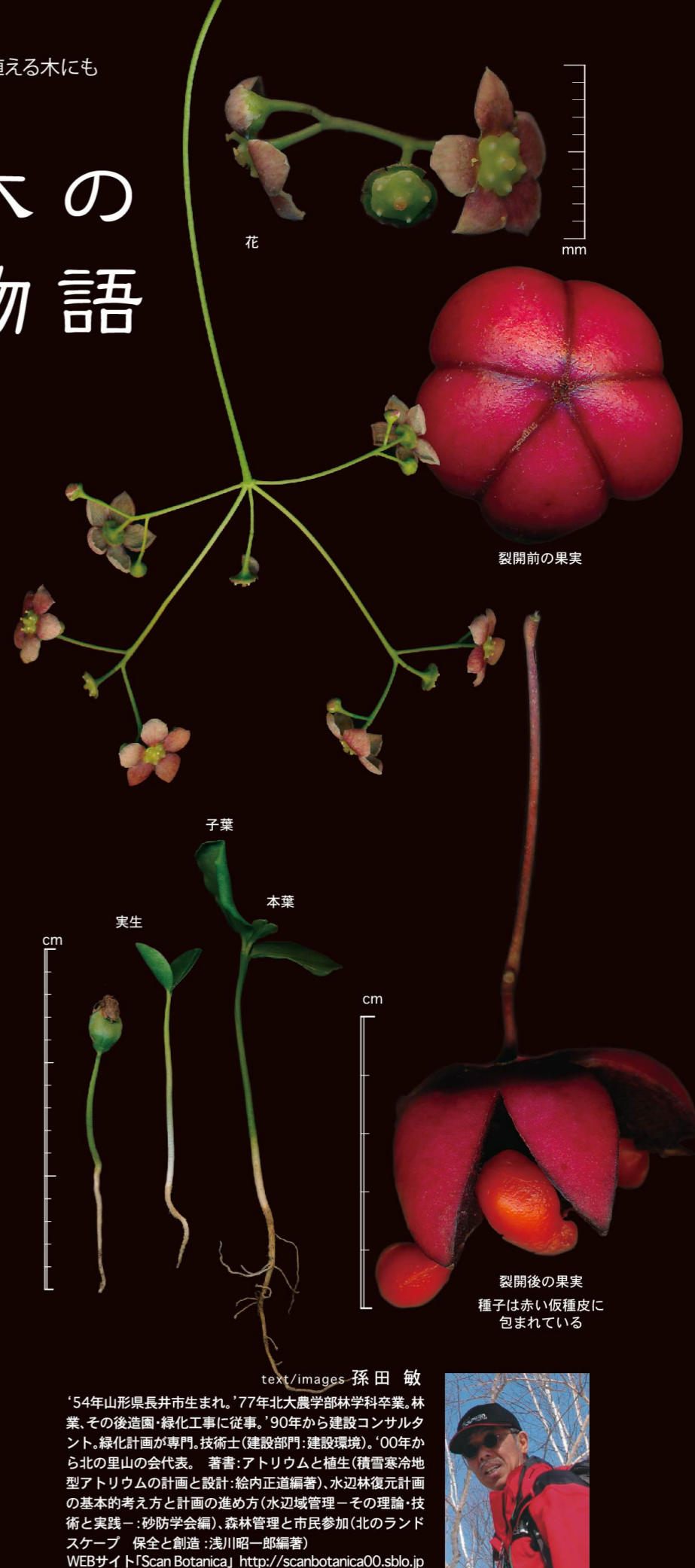
ツリバナは北海道のほぼ全域に生育しているニシキギ科ニシキギ属の落葉広葉樹低木です。樹高は4~5m。落葉広葉樹林内で見られますが、夏の葉が生い茂っているときには目立たず、尖った冬芽が目立つ冬や赤い実がなる秋になると「あらっ、ここにも」と改めて気がつく樹種です。果実や紅葉が美しいため庭や公園などで植えられているので、お目にかかる機会が多いでしょう。

漢字で書くと「吊花」。花や実が垂れ下がって付いているようすから名づけられました。木工作家たちからは「エリマキ」と呼ばれています。ツリバナやその仲間のマユミの材質は、肌が白くて手ざわりがよく、さらになめらかで美しいので、印材・こけしや彫り物などに使われました。歯ごぼれにくいので、くしにも加工されたとか。ツリバナだけではなく、同じグループで似たような材質のマユミも併せて「エリマキ」としています。名前の由来は不明。

アイヌ語ではクニツ(弓の木)とかコムケニ(曲がる木)といわれ、かつては弓や矢をつくるための重要な木でした。

ツリバナやマユミは生け花の材料としても使われます。芽のつき方がよく枝の線がきれいで、枝ぶりもよいから、という理由のようです。ツリバナならばどんな枝でもよいかという決してそうではなく、できるだけ節間(枝と枝の間)が詰まっているものがよいとされています。肥沃な土地で育った成長がよいものは、「木がぼんやり育っているのでダメだ」という言い方をされて使われません。適当に採ってれば花材になる、というわけにはいきません。

9月の中頃になると球形の果実は熟して5枚の殻に裂け、中からオレンジ色の仮種皮に包まれた種子が現れます。札幌の羊ヶ丘にある森林総合研究所の見本林には、ツリバナ・マユミだけではなく、その仲間のクロツリバナ・オオツリバナ・ヒロハツリバナと一緒に植えてあります。紅葉の季節、これらの果実の違いを確かめに出かけてみませんか? ✿



text/images 孫田 敏

'54年山形県長井市生まれ。'77年北大農学部林学科卒業。林業、その後造園・緑化工事に従事。'90年から建設コンサルタント。緑化計画が専門。技術士(建設部門・建設環境)。'00年から北の里山の会代表。著書:アトリウムと植生(積雪寒冷地型アトリウムの計画と設計:絵内正道編著)、水辺林復元計画の基本的考え方と計画の進め方(水辺域管理—その理論・技術と実践—:砂防学会編)、森林管理と市民参加(北のランドスケープ 保全と創造:浅川昭一郎編著) WEBサイト「Scan Botanica」<http://scanbotanica00.sblo.jp>



広がる、つながる。コープの森づくり

あすもりが生まれた頃には、1箇所だったコープの森。今は北海道中に輝く星のようにきらめいて、つながって、未来の森を夢見ています。



みんなで作ろう あすもり座

あすもり10周年を記念して制作したのが「あすもり座」の大きなフラッグ。各地の植樹祭で子どもたちがひとつひとつの木に色を塗り、あすもりポストに投函。みんなの木が各地から集結し、フラッグに描かれたあすもり座に貼り付けてもらって完成。この10年で道内16に増えたコープの森を星座に例え、みんながつながって育てる森づくりであることを表しました。こんなふうに、豊かな森がもっともっと北海道中に広がっていくように、森づくりを続けていきましょう。



6/11 当別道民の森 第10回 コープの森植樹祭



今年ものべ300名を超える多くのみなさんが集まって、昨年Fの森ワークショップが計画した植樹を行いました。午後はネイチャービンゴやガイドウォークで森とふれあい、森に思いをよせる一日をすごしました。

今年も全道のコープの森で植樹祭が行われ、4000本以上の木が植えられています。

札幌西地区 6/18 コープ未来の森づくり 赤井川植樹祭



78名が参加し、カラマツ400本を植樹しました。急斜面での作業は大変でしたが、みんなでいい汗をかきました。10年後が楽しみです。

苫小牧地区 5/27 むかわ植樹と木工体験



あいにくのお天気の中、74名が参加。笹の根が張る地面の植樹は大変でしたが、みなさん真剣に植樹していました。午後は木工体験でキーハンガーを作りました。

旭川地区 5/27 コープ未来の森 植樹祭



47名が参加しました。微妙な天気でしたが、なんとか400本を植えることができました。午後は天候悪化のために中止となってしまいました。

6/3 釧路地区 コープさっぽろ 未来の森「植樹祭」



50名の参加者でトドマツ400本を植樹しました。午後は森林組合の指導で木のホームプレートを作りました。

5/21 帯広地区 未来の森植樹祭



台風の影響の残る新得町の植樹地には39名が集まり、カラマツ280本を植樹しました。

5/13 室蘭地区 未来の森植樹祭



77名が参加し、洞爺湖町でアオダモ400本を植樹しました。あすもりのことを学び、温泉も楽しみました。

6/17 北見地区 未来の森づくり 第8回植樹祭



晴天に恵まれ、77名の参加者であった間にカラマツ400本を植樹しました。午後は竹の水鉄砲づくりを楽しみました。

5/20 南空知地区 未来の子ども達のために 栗山に木を植えに行こう



100名が参加し、トドマツ400本を植樹。午後は薪割りやきのこの菌打ち、どんぐりの工作などで森の時間を楽しみました。

小樽地区 未来の森植樹祭は、10/15に開催されます。

今みてい星の光は、何千年何万年と長い長い時間をかけて、私たちの目に届くんだって。木はかき育ってゆくのも、なんがかかいてくるかも。長い長い時間をかけて、一本の木を育ててゆく。木を植えては月ごとくこと。私たちがしていることは、いのちをつなぐ、物語り。ゆとりゆくりだけどもそれは、たしかに、遠い未来の大地のために。未来の森へ、森からの手紙。

森づくりは人づくり

どんな森をつくる？
市民による市民のための森づくり計画

Fの森 ワークショップ

Since 2013

野を越えヤブを抜け、
未来の森を想像するWS、
今年も元気に歩いています！



7/1 刻々と変わるFの森。
育樹と調査で行く末を見守ります。

2017年のFの森ワークショップもはじまりましたよ。今年
は夏からのスタート。訪れたFの森はもう背丈を超えるオオイ
タドリが繁茂していました。

集まったのべ20人のメンバーは、改めてFの森を歩き回って、植えた木々を探しながら、日光を遮っ
てしまう草を抜きながら、植物や虫たちを観察しました。2013年から始まったワークショップですが、
この4年間で元から生えていたヤチダモの木立はずいぶん大きくなりました。一方で私たちが植えた
木々は雪に倒れ、動物に食べられながら一生懸命空に枝を伸ばしています。

後半はそんな木々を手助けする育樹作業も行いました。頑張っている木を見失わないように
女竹を刺し、成長をモニタリングするための樹高を調査します。後半はあいにくのお天気になりましたが、
みなさん、自分の子どもたちを見守るように大切に木々をいつくしんでいました。



最初からワークショップに
参加していますが、それまではあまり
木のことは知りませんでした。

参加してみたら、講師の山本さんの話は
おもしろいし、いろいろ学んでいます。

それと、スタッフも参加者もみんないい人。
だから今ではみんなに会うのが楽しみです。
森づくりで人の輪ができて、仲間が大切になりました。
Fの森にはたくさんの種類の木がうえられています。
だから、将来、次世代に向けての木の博物館みたいな
森になるといいですね。

人生よりも長い活動、未来につながる
活動に参加できるのはうれしいと、
しょっちゅう思います。



高橋 広子さん
Fの森ワークショップ参加者

9/2 来年の植樹地をどうしようか？
未開の土地まで探索します。

9月2日のFの森はもう秋の気配。今回の探索は、WSの当
初に調べた未開エリア。植樹する場所がだんだん手狭になっ
てきたので、いよいよそちらも考えようというわけです。未開
のエリアは手付かずです。背丈を軽く超えるオオイタドリやク
マイザサで大変なヤブに育っていました。そんなヤブだって
慣れっこになってしまったWSメンバー、しっかりした足取り
で歩き回るのでした。樹木調査では、4年前の植樹地を調べ
ましたが、数を減らしながらも生き残ってなんとか背丈を超
えるようになってきました。また、今回は後日の育樹祭で行
うイタドリ笛を作る予習も行いました。みんな童心にかえっ
て森にイタドリ笛の音が響き渡りました。

さて、ここからは来年に向けてどのような森をつくってい
か、樹種やエリアを具体的に検討していくこととなります。次
回の植樹祭にはどんな木が植えられるのでしょうか。

森づくりは人づくり

考えていこう。
人と動物と森のいい関係！

円山動物園で環境教育 どんぐりプロジェクト

2017年も、動物園とコラボして
人と動物をつなぐ森づくりを
子どもたちと挑戦中！



5/14(日) 円山動物園の森を歩いて、
カエルやヘビのことを勉強したよ。

ちょっと肌寒くて風も強いけど、集まった9人の子どもたちは動物園の森づく
りに興味津々。普段は一般の人が入れない「動物園の森」に行くと、そこには
カエルやサンショウウオが産卵する小さな池。見つけたおたまじゃくしやエゾア
カガエルを食い入るように見つめていました。

動物園を回って、去年どんぐりを植えた苗畑では、発芽したどんぐりに歓声。
大きく育って、動物たちのエサになるとどんぐりがたくさん実るといいね。

最後に訪れたのは「は虫類・両生類館」。飼育員の本田さんに
案内してもらいながら、北海道に住むは虫類と両生類につ
いても学び、特別にバックヤードにも入れてもらいましたよ。

今回もたくさんの動物たちの秘密を知りました。彼らの
暮らしを支えている豊かな森は北海道の宝物。そのことに
誇りを持って、森づくりを続けよう！

円山の原始林はたくさんの
両生類が暮らす素晴らしい森なんです。
この森が近くにあることを誇りに
思っています。

木と草と動物、いろんな生き物がいて、
食べたり食べられたりしているのが豊かな
森。そんな森を、円山に
つくってくださいね。

本田 直也さん(は虫類・両生類館飼育員)



いろいろはつぱ

写真・文 / 小寺卓矢 (アリス館)



葉っぱにはいろんな形がある、なんていう当たり前のことだって普段は忘れがち
になっているわたしたち。ひとつずつ丁寧にみればばら、改めて、森は多様
性の宝庫なのです。そんなことを気づかせてくれるのが「いろいろはつぱ」。あすもりの
イベントでも撮影を担当してくれている森の写真家、小寺さんによる森の絵本の
最新作です。この絵本は、森にはいろんな大きさや形の葉っぱがあることを教えてく
れます。その違いを豊かな森は何もいわずに抱きとめている。あ、これってきっと人
間社会も同じ。一人ひとりがちがう形。違うところ。違いを認め合って抱きとめるか
ら豊かな社会ができあがる。そんなことも伝えてくれているような気がします。
いろんな形があっていいじゃないか。優しい気持ちになれる絵本です。ぜひ親子
で読んでみてください。

“大好きな友達”を
紹介するような気持ちで
作った本です。
皆さんもぜひ森で
素敵なはつぱたちに
出会ってくださいね！

小寺卓矢さん

Event Report

森に触れよう。森を学ぼう。全道でひろがる、

つながる森づくり企画

～小樽地区(5/13)～



「ふれあい企画」改め「つながる森づくり企画」の小樽地区では、例年どおりに真狩村のごとう農園へ。曇り空でお天気はいまひとつでしたが、満員の申し込み。

参加者はクイズの出題にそって木のこと、山菜や動物のこと、そして作物のことなど、ひとつずつ説明を受けながら森の中を散策しました。途中、植樹をしたり、みんなでノコギリをふるって数年前に植樹したカラマツの枝落としに挑戦。きのこの原木への菌打ちなども体験し、森の学び盛りだくさんの時間を過ごしました。お昼ご飯はごとう農園の野菜たっぷりのカレーをいただきます！少し肌寒い一日でしたが、参加者からは自然に触れ、農業を知るよききっかけになったとの感想も聞かれ、学びを深める機会になったようでした。

こうした「つながる森づくり企画」は各地区委員会で企画されています。みなさんもぜひ参加して、森とのふれあいを楽しんでみてください。

いつも満員で、参加した人にも満足してもらっています。それは、木を感じるよい機会だからだと思います。植えるだけでなく、切ったり、その匂いを嗅いだり、触ったり、木を五感で感じて帰ってほしいです。



後志エリア委員長 北條綾子さん

協賛企業に聞いてみた。応援しています コープの森づくり #12

株式会社 北海道サンジェルマン

http://www.h-saint-germain.co.jp/index.shtml

北海道サンジェルマンは、スーパーなどのお店でパンを製造・販売しています。今はコープさっぽろの店舗をはじめとして、道内65箇所まで3つのブランドを展開しています。焼きたてパンにこだわっているため、パン工場は持っておらず、すべてそれぞれの店舗で作り、焼きたてを出しているのが特徴です。

私は北海道出身ですが、一度東京で暮らしていました。でも食べ物や気候風土など、やっぱりこっちの方が好きでUターンしてきました。今も北海道に愛情を持っていますし、これからもより北海道を意識したお店づくりをしていきたいと思っています。パンの材料は水、小麦、塩、酵母で、自然の恵みでできています。特に水や、小麦が育つ土は森から生まれます。ですから、コープのエコ協賛でホックョクグマ応援プロジェクトや森づくりに協力できることはうれしく思

いますし、これからも北海道の自然の恵みを大切にしていきたいですね。*



話してくれたひと 株式会社 北海道サンジェルマン 田中 宏明さん

Report

コープ未来の森づくり基金 2016年度 活動報告・会計報告

今年度の総植樹本数は8,975本、全道の「コープの森」では1,079名の組合員が、4,410本を植樹しました。「育樹祭」も2回目となり、たくさんの親子が参加しました。森づくりボランティアの「あすもりサポーター」は1,205名となりました。

「Fの森」では「森づくりワークショップ」を開催し組合員が参加する森づくりが進みました。大学生をはじめとする若年層、アーティスト、シンガーなどメンバー層が幅広くなるとともに、道総研林業試験場と協働で行っている 市民参加型樹木成長調査も順調に進行し特色ある森づくり活動となっています。

森づくり団体への助成金として高額の助成を4団体、小額助成を14団体に支援

し、北海道ぎよれんの魚付林植樹活動への助成をおこないました。

第7回北海道の森づくり交流会は『人がつくる森～森林再生の可能性』をテーマに速水林業株式会社の速水亨氏の講演により、学びを深めました。

調査研究活動として、胆振・日高地域の助成先3団体を訪れ、アイヌの自然と共生する知恵、伝統的生活空間としての森林再生について視察しました。

基金レポート「モリイク」は第11・12号を発行、「あすもりサポーター通信」は第41号まで発行、SNS広報、「モリイクfacebook」でも「いいね!」が1000を超え順調に増えています。*

2016年度収支一覧

	16年度予算	16年度決算	内容	(単位:千円)
レジ袋積立	22,580	23,122	レジ袋辞退の積立金	
協賛金	4,930	4,299	エコ協賛金、企画協賛金	
収入計	27,510	27,421		
植樹森づくり活動	11,520	11,439	植樹活動、森とのふれあい企画、森づくり交流会	
助成金支援	7,000	5,366	森づくり団体への助成	
広報啓発費	1,600	1,377	基金レポート「モリイク」、サポーター通信発行	
基金運営費	7,390	8,142	基金運営費用	
支出計	27,510	26,324		

2017年度 コープ未来の森づくり基金 助成団体一覧

高額助成(活動案件への助成)

- ◆ 森と川のようにえんこロポックル(標津町) 【案件名】きつつきの森に五右衛門風呂をつくろう! ~森の恵みを暮らしに活用する体験プログラムの創出~
- ◆ 認定NPO法人サロベツ・エコ・ネットワーク(豊富町) 【案件名】どんぐりの森づくり ~稚内内砂丘林再生プロジェクト
- ◆ 認定NPO法人霧多布湿原ナショナルトラスト(浜中町) 【案件名】気軽に楽しめる霧多布の森づくり
- ◆ 盤渓癒しの里山づくりプロジェクト委員会(札幌市) 【案件名】盤渓癒しの里山づくり活動

小額助成(団体への助成)

- ◆ 池田町林業グループ (池田町)
- ◆ 木育マイスター道南支部 (森町)
- ◆ NPO法人 トラストサルン釧路 (釧路市)
- ◆ 間伐ボランティア 札幌ウッディーズ (札幌市)
- ◆ NPO法人 ezorock (札幌市)
- ◆ 森づくり調査研究会 (江別市)
- ◆ 手稲さつ川探検隊 (札幌市)
- ◆ 河川愛護団体 リバーネット21 ながぬま (長沼町)
- ◆ NPO法人 大雪山自然学校 (東川町)
- ◆ 飛生アートコミュニティ (白老町)
- ◆ 熊の沢公園の自然と親しむ会 (札幌市)
- ◆ 北海道林業技師会 (札幌市)
- ◆ NPO法人 エゾシカネット (札幌市)
- ◆ 当別森林ボランティア シラカンパ (当別町)

エコ活動 コープの取り組み

コープさっぽろ エコセンター

この秋、新しい施設がオープンします!

コープさっぽろエコセンターは、コープの事業と組合員さんから集めた回収資源を集積・再資源化するための施設です。ダンボールや新聞紙など8品目について、2016年度には3万2千トン回収しました。そのCO2削減効果は1万8千トンにもなります。今後もカラートレーなど、回収品目を増やし、コープの事業から出る廃棄物をゼロに近づけていく方針です。流通を上手に活用するなどの工夫によって、「事業化できる資源循環センター」として北海道の環境への貢献の一翼を担っています。



大切な資源を有効に使うぞ!

その中で、コープが取り組む様々な環境活動を伝える環境学習の拠点として、エコセンターに10月1日にオープンしたのが「トドック・エコステーション」。地域の人や子どもにもわかりやすく、楽しく環境への取り組みの大切さを伝えたり、施設そのものの床や壁をみんなで作るワークショップを開くなど、新しいコンセプトで組合員のみなさんと環境をつないでいきます。

みなさんも、環境活動について学び、北海道の未来のために何ができるかなどを考える機会として、ぜひエコセンターを訪れてみてください。



エコセンターセンター長 川崎 清嗣さん

Present アンケート&プレゼント

「モリイクvol.14」いかがでしたでしょうか。今後の紙面づくりのために、アンケートにご協力をお願いします。

- Q1 モリイクを読んだ感想をお聞かせ下さい。
- Q2 面白かった記事・つまらなかった記事はどれですか? 右から3つずつお選び下さい。
- Q3 森づくりの活動に参加したことがありますか? (はい・いいえ)
- Q4 コープ未来の森づくり基金の活動へのご意見があればお聞かせください。
- Q5 取り上げてほしい記事のテーマがありましたらお書き下さい。

巻頭コラム (P2) あれから、どうなった? (P3~7) 木づかい (P8) 大きな木の小さな物語 (P9) 森のキモイ!キレイ? (P10,11) 森林再生コラム (P12) コープの森づくり (P13~15)



PRESENT!

アンケートに回答いただいた方から抽選で2名様に、子どもたちがデザイン・制作した箸置きをペアでプレゼントします。この秀逸なデザインで食卓を彩ってください。

応募方法

アンケートの回答を記入の上、住所・氏名・年齢・連絡先を明記の上、はがき、FAX、メールにてお送り下さい。プレゼントの当選は発送をもって替えさせていただきます。

応募締切 11/30(木) 当日消印有効

コープさっぽろ基金事務局

〒063-8501 札幌市西区寒葉11条5丁目10番1号
FAX: 011-671-5743
メール: csapmori@todock.jp



携帯メールはご遠慮ください